

## 【国語科】

### 比較を通して楽しく学び合い、伝え合う力を高める

#### 1. 「意味と内容」がひろがる国語科の学び

読み取ったことを生かして表現活動を行う。登場人物の心情を追う中で、疑問や課題を共有し、自分自身の課題として捉え、課題解決しようとする。また、話すことや書くことの中で、学習したことを積極的に生かし用いていく。このような通り一遍の学習からどのように脱皮していくかを模索してきた。そのための手段として比較を用い、比較をしていく中で言葉についての認識力を高め、伝え合う力を高めていこうとしている。

はじめから教師側が持っている発展的な学習とは区別して、子ども自らが自分たちの力で自分たちの学習を行い、そこに教師が寄り添いながら知恵を出し合い、「意味と内容」をひろげる学習を目指すわけであるが、そこに、ものの見方をさまざまな角度から持たせることでそれが可能になるのではないかと考えている。

読み取る際の子どものものの見方を助けるために、例えば、具体物を提示し、そのものをより身近に捉えさせたり、実物の大きさを壁いっぱいの影で見せたり、挿絵を使ったりすることによって、子どもの思考を文章の中の思考から生活の中にまでひろげていく。

また、言葉の意味の二重性や言葉の多義性を理解させることによって物語の中の言葉が持つ奥の深さを感じ取らせていくことを大切にしていく。例えば、「ごんぎつね」のごんのいたずらは、ごんにとっては楽しいことであるが村人にとってははいまいましいことであるということや、ごんの死は「悲しさ」と捉える面があるが、心の通った瞬間として「うれしさ」とも捉えられる面もあるだろう。「悲しさ」と「うれしさ」がこの場面に流れると感ずることによって「うれしさ」の捉え方、言葉の捉え方、場面の捉え方にひろがりを持たせることができる。

このように、言葉に対し、イメージをひろげたり疑問を持ったりしながらものの見方にひろがりを持たせることが、作品に驚きや新たな感動を与え、作品理解、作者理解へと歩んでいけるものと考えている。そうして、自分自身を振り返りながら、自分自身の考え方や行動、生き方について考えていく子どもを育てていきたい。

そのためには、単元構成の段階で、物事を多面的に見ることができるような教材を選ぶ目を養っておかなければならない。

一つの作品から似たような内容の他の作品へ本の世界を広げたり、同一作者の作品から作者の人柄や作品に流れている思いを感じたりしていくことも確かに広がりを感じられるであろう。しかし、こういった広がりについては、授業者の単元設定の仕方をどうするかで本の世界を広げたり、作品をたくさん読ませていくことで作者の作品に流れている一貫した思いに迫ったりしていくことはいくらかでも可能である。しかし、国語科での「意味と内容の広がり」は深めていくところにあると考えている。授業の中で物事の本質や価値観など、追究の対象に迫れる糸口を子どもたちの発言の中から見つけ出し、授業の場に乗せていく（全員の理解を得られるものにしていく：まなざしの共有）ことが「広がり始まり」となると考えている。

#### 2. 国語科でめざす子どもの姿

国語科の果たすべき役割は、相手を考えたり目的を考えたりして順序よく話す力、より論理的に筋道を立てて話す力、話したい中心を確実に伝える力、分かりやすい表現で話せる力を持たせることである。また、相手の願いや経験、気持ちに寄り添いながら、相手が何を言おうとしているのかを察知する力、大事なことを落とさないように聞く力、自分の考えと比べて聞く力も合わせて持たせなければならない。つまり、「伝え合う力」を持たせることであり、この「伝え合う力」を高める学習は、生きてはたらく言葉の力を身につける学習である。そして、それは今の時代に

欠かすことのできない内容とも言える。

国語科が国語の基礎的・基本的な内容を系統的に身に付けさせる固有の目的をもった教科であるということを考えた時、この「伝え合う力」を高めるということは国語科で担うべき重要な役割であり、私たちがテーマとして位置づけた理由でもある。

### 3. 研究仮説

#### (1) 研究テーマ設定の理由

##### ①わたしたちを取り巻く言葉の環境

日本人の活字離れが指摘されるようになって久しい。映像の氾濫などいろいろな要因が重なり合って今日の状況が生まれてきている。また、めまぐるしく変わっていく社会に対応できない大人が増えているのも事実である。言葉から離れていくことで、社会の変化に対応できないどころか、社会の変化の渦に巻き込まれてただ流されるように生きているといった、主体性を失ってしまった雰囲気さえ感じてしまう。そういった状況に対して、主体的に対応していける子どもを育てるためには、子ども自らに、対象のどこをどのように見るかというものを見る力・考える力、自らの思いを持ち、その思いを表現できる力を持たせなければならない。

##### ②言葉を大切にする

私たちがテーマについて考える時、言葉を抜きにしては考えられない。私たちが扱う対象が、物語や説明文、作文、漢字、話し言葉といった言葉そのものであり、さらに、それを、言葉を媒介として練り合わせていくからである。

言葉は、ただ一つの言葉として存在しているだけではその言葉の持つ意味そのものでしかありえない。それが、ひとたび物語文の中へ入ってしまうと、その言葉の持つ意味が実に多様化する。それは、物語の時代や場所、人物どうしの関係、行動などの条件に左右されるからである。物語の条件が変わることで、同じ言葉がまったく逆の意味にも取れることもあるからである。そういった生きた言葉であるからこそ、物語の時代背景や場所、人物どうしの関係、行動などの条件を常に意識しながら、一つひとつの言葉にこだわり、その言葉を正確に吟味し、その言葉の持つイメージを広げる必要がある。自分の生活経験に照らし合わせることで、さらにイメージを膨らませることができるようになるのである。

##### ③国語科における比較の利用・効果

本校国語科では、伝え合う力を高めることを最終の目標とし、そのための方法をいろいろと模索してきた。研究過程で、伝え合いの質を高めるためには、認識力を高めることが不可欠であり、認識力を高めるための研究を行うことで伝え合う力を高められるという考えに至った。

そこで、物事を認識する方法の一つである比較を国語科で有効に利用して、認識力を高め、伝え合う力を高めていこうと考えたのである。

比較は、物の認識力を高めるために用いられる、一般的・普遍的な方法といえる。数量の比較・質の比較・価値の比較など、普段の生活の中で比較を取り入れた物事の認識が無意識のうちになされている。比較によって認識力が高まるのは周知の事実である。

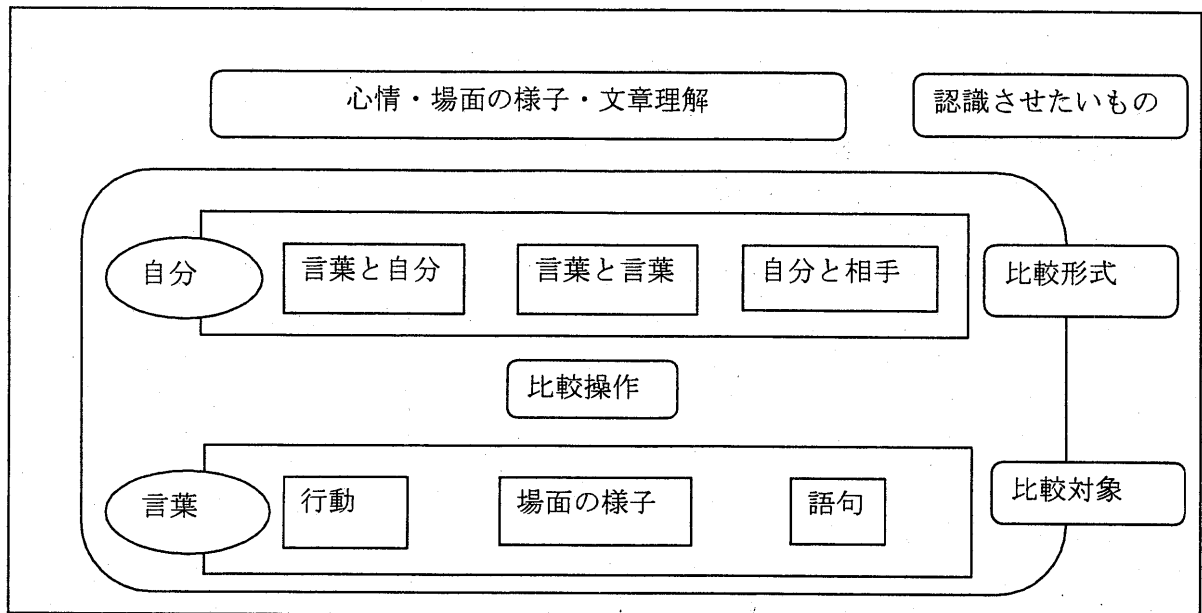
そこで、私たちは、自分の考えを作る過程や伝え合う過程で、「比較」を意識させることにより、どんな場面でも自分の中での比較や自分と相手との考えの比較を行っていくのではないかと考えた。そして比較することにより、より深い認識力が育ち、深い読みが実現できるのではないかと考えた。深い読みが実現することで、本来読みきれなかった読みの楽しさを味わうことができると考えたのである。また、それは、読書の世界を広げる可能性も秘めている。

そうすれば、認識力の高まりが、より深い比較を行える力となっていく。それぞれの力がスパイラル的に高まっていくと考えたのである。

#### (2) 国語科における比較の分類

比較には、大きく分けて次の3つが考えられる。

①言葉と自分との比較。②言葉と言葉の比較。③自分と相手の比較。



①は、物語の中に表現されたイメージや意味、題材、主題、思想、物の見方・考え方、発想、主人公の行動などの対象と自分の生活経験の中で獲得してきたその言葉の概念や知識、社会的な規範との比較である。言葉の持つイメージを考え、自分の中で対象についての比較を行う。その言葉を取り囲む物語の背景、条件、順序といったその言葉の回りにある要素を考慮しながら比較を行っているのである。

例えば、「優しさの表れているところ」を見つけるときには、文中の主人公の行動を意識しながら「自分だったら」というように自分の生活経験と比べたり、「普通なら」というように社会的規範と比べたりする。

②は、文章中の語句と語句、行動と行動、場面ごとの様子、物語のはじめと終わりの比較などである。物語のはじめと終わりの人物の行動を比較することは、時間の変化や条件の変化などにより微妙に移り変わっていく人物の心の変化を捉えるのに有効である。また、はじめの読みと終わりの読みを比較することで自分の読みの成長にも気付くことができる。

③は、自分の考えを持ちながら学習に臨む中で、相手の意見を聞く。相手の意見を聞く際、自分の考えと似ているところや違うところを意識することで自分の考えを整理する比較である。比較しながら聞くと聞いたほうがわかりやすいかもしれない。相手の考えを聞くたびに文へ戻り、文と自分の考え、文と相手の考え、そして、自分の考えと相手の考えを比較する。そして、相手の意見も生かしながら新たに自分の考えを創りあげていく。

友達の意見を意識させることで、例えば、「みんなの意見を聞いていて思ったことは」、「～君に付け足して」、「～さんに賛成で」、「～さんとよく似ているんだけど」、「そこまでは賛成なんだけど、～には反対です。」のようなつなぎ言葉が見られるようになってくる。

①～③のどの比較にも共通することは、比較する過程において、自分の生活経験や社会的規範といった自分が物を考える時のよりどころ（観点）をもって比較しているということである。

### （3）比較を意識した伝え合いの場を持つ

伝え合いでは、相手によく分かるように伝えるために、何をもとにしたのかという観点を示しながら比較し伝える機会を多くすればするほどお互いが対象をより深く認識していけると考えた。

話し合いの際、①の発問の場合なら、「ふつう、～は～だけれど、この登場人物は～だから優し

いと思います。」や、「もし、自分なら～しているけれど、～は～だから自分の考えを貫く人だと思えます。」のように、「ふつうは」とか「自分なら」とか、自分の生活経験の中から創りあげられた自分なりのものの見方・考え方と比べての発言を期待できるであろう。

話を聞く側からすれば、話す側の、対象についてどんな観点で比較をし、自分のどんな生活経験からどう思うかを明らかにする発言は、話す側の認識力を高めるだけでなく、聞く側の認識力をも高めることにつながる。そうであるからこそ、普段の伝え合う学習の場から、比較を意識した発言をする習慣を付けておきたいものである。

#### (4) 伝え合いの質を高める学び

そこで、②の発問、つまり、文章中の語句と語句、行動と行動、場面ごとの様子、物語のはじめと終わりの比較をさせ自分の考えを持たせる発問を多く取り入れるようにすれば、比較する観点を見つける力や伝える言葉の中に比較対象を明らかにしながら論理的に話せるような力がつくのではないかと考えた。

比較する時の観点を見つける力はきわめて重要である。生活の中では、私たちは知らず知らずのうちに2つの物や事について簡単な観点から複雑な観点にいたる比較を無意識のうちに行っている。そうすることによって物や事ある観点を見て、自分の考えを持ち、ものの見方や考え方を高めている。数や量、思いの強さや弱さ、価値の大きさ小ささなどについてである。

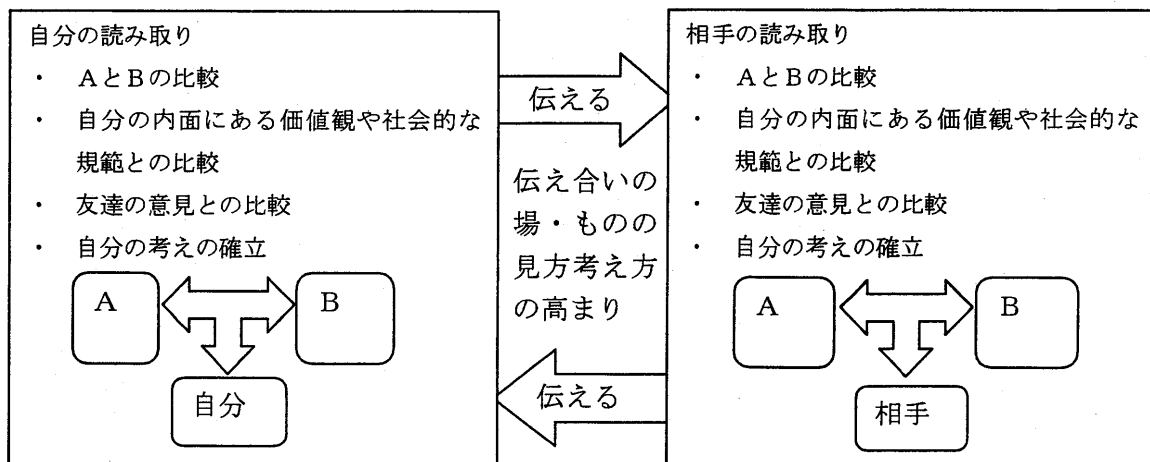
国語科でもそういうことは日常行われている。しかし、私たちは、あえて発問を投げかけることによりこの比較を子どもたちに意識させることで、複数のものを同時に見て、常に共通するものを見つけたり微妙な違いを意識させたりしながら、複数の物事のどこ目を向けるのかを意識させていきたいと考えた。つまり、観点を見つけることはものの見方を育てることにつながるのである。

②の発問なら、話す側は2つの対象のどの観点をどう比較し、どう明らかにしているのかを話さなければ答えることができないからである。②の発問を多くとれば、物事を比べて見ようとする習慣が付き、認識力が高まり、その力が、①のような発問のほか、どのような発問に対しても、比較を意識しながら発言ができるようになっていくと考えたのである。

このように、国語科では、言葉にこだわり、比較を意識させることで、教材とじっくり向かい合い、相手の考えをじっくり聞き、お互いの意見交換をより質の高いものにしていこうと考えている。そうして、お互いの読み取りのよい点悪い点を指摘し合いながら、より深く物事を認識していき、質の高い伝え合いのできる学級集団を創りあげていきたいと考えているのである。

### 4 国語科学習でのまなざしの共有

それぞれの子どもの作品に対するまなざしは、一人読みから一斉読みへと移りまた一人読みへと返るその繰り返しのにおいて、他の子どもものの見方を知り、考え方に耳を傾けることで、よ



り多角的に作品を見ることができるようになっていく。それと同時に、作品に対する考え方もより深くなっていく。

まなざしを共有している場面を「やまなし」の学習を例に挙げて紹介する。

一度「やまなし」を読んだ後、宮沢賢治の生き方を知り、もう一度「やまなし」を読んだ実践である。子どもたちは、明らかに宮沢賢治の生き方を知って自分の読みを変化させていた。同じ「やまなし」を読んではいるが、自分の心の中に響いてきた宮沢賢治の生き方がどの子にも反映されている。自分の読みと自分の読みを比べているのである。後者の自分の読みは宮沢賢治の生き方というものの見方・考え方、考える根拠、尺度が頭の中に入っている。作者がこの作品を書こうとした欲求や時代背景も少なからず理解できている。この作者読みは、作者という一人の人物を好きになり、作者の作品を好きになる効果をもたらせてくれた。また、進んで作者の他の作品を読み進めていこうという意欲や関心も増していくという効果もあった。

また、その上で、前者の自分の読みを向上させるために、他の子どもと自分の読みを比較し、自分の読みの中に取り入れていこうとする積極性も持たせるために、自分の読みの中に他の子どもの読みをどう取り入れていくか、お互いの読みをどう響き合わせていくかという集団読みの比較の方法が一つ確立できたのではないかと考えている。

また、A君は一時間のこの授業の中で自分の考えを変化させている。

七十二ページに、かわせみが怖いと言っているが、父さんが心配して、安心しろと言っているのが二つもある。これはたぶん、何とかして農作物の被害を少なくし、人が安心して田畑を耕せるようにできないものかという言葉から来ている。安心してできるようになってほしいという願いが書き込まれている。

この授業に臨む前、宮沢賢治の生き方を知り、もう一度「やまなし」を読んだ時には、五月に起こる出来事を世の中の不安と捉え、それに対して宮沢賢治が「安心しろ。」と説いて回る様子を「五月」に感じていた読み取りであった。授業が進んでいくにつれ、子どもたちの興味も「十二月」に移っていった。A君も、不思議なクラムボンや突然やってきたかわせみの恐さ、魚の死、兄弟のいさかいなどの不安な出来事もやまなしの登場ですべてが楽しさに満ちた世の中になっていくことを捉え、「五月」と宮沢賢治の災害に対する思いという捉えで見えていたところから、「十二月」にも目を向けた「やまなし」と宮沢賢治の生き方という、全体を見るものの見方・考え方ができるようになった。友達の、「五月と十二月の様子が違うというよりは、やまなしが出てきてからかにたちの様子が変わってきている。」という意見を聞いて自分の考えも変化させた。

五月は農作物の被害などが多くて人々が安心して暮らせない様子で、それを宮沢賢治が安心しろと言って農家を回っているのと似ている。十二月でも、たいしたことはないけど兄弟のあわのはき合いは人々の争いごとや世の中がうまいかないことを表していると思う。でも、やまなしが出てきた後は、かにたちも争うのをやめてみんなでやまなしを追いかけている。だから、やまなしが理想でやまなしのように回りの人にいいにおいや気持ちを与える世界を宮沢賢治は望んだんだと思う。

自分の考えにもこだわりながら友達の考えも大切にし、自分の考えと友達の考えをすり合わせながら新しい自分の考えを創りあげていったところに読みの成長が見られた。

読みの過程において、比較を駆使することによって、「やまなし」を分析していく力、作者を意識しながら作品を読み深めていく力、新たな発見をする力、友達の考えと自分の考えを比べ違った角度からもものを見る力など、ものの見方や考え方が育ったのではないかと考えている。

一人の子どものまなざしにも、どうしてそのように考えたのか根拠を明らかにしていくことで、クラス全体が一人の子どものまなざしを理解し、大切にしていく。一人一人のまなざしにみんなが目を見ていくことで、作品に対するまなざしを共有していくとともに、お互いに向けるまなざしの質を高めていくことができるのである。